

きべりはむし

第20巻 第1号

目 次

兵庫県産甲虫類研究史概説(1)	高 橋 寿 郎	1
兵庫県のアリモドキ	高 橋 寿 郎	5
尼崎西南部の昆虫(その6)	新 家 勝	16
街に住みついたツマグロヒョウモン	新 家 勝	19
宝塚市清荒神のチョウ(追録8)	加 藤 信 一 郎	25
笠形山のオオキノコムシ	森 田 真 澄	25
福知溪谷でヨツボシヒラタカミキリ採集	森 和 夫	27
リビアからの虫便り	伊 藤 時 雄	28
県内学会誌・同好会誌 会員異動		

兵 庫 昆 虫 同 好 会

1992年5月

兵庫県産甲虫類研究史概説(1)

高橋 寿郎

本研究史はかつて筆者が“兵庫生物”誌上に発表させて貰ったものであるが(Vol.6, No.5:350-351, 1974, Vol.7, No.1:37-38, 1975, Vol.7, No.2:75-76, 1976, Vol.7, No.3:128-130, 1977)発表以来年数も経っていて新しい資料も見つかったりまた前回以後の解説も必要となってきたので古い所は余り変更の要はないのであるが今一度始めからまとめ直してみたものである。

動物学、昆虫学が日本に独立したのは明治以降のことであるがそれ以前では昆虫の研究は博物学の中に包含されており、その博物学や本草学から分化し物産学や名物学というようになったのは江戸時代まず元禄からと云えよう。

日本では中国から儒仏に伴ってわが国に伝来した本草の学は薬に関する知識の培力となったが7世紀以降17世紀にいたる久しい才日の間は著しい発達を見ない暗黒時代であった。

ところが近世になって江戸時代の文教の興隆に伴い本草学は薬物学として発達したばかりでなく博物学も物産学や名物学に育ってゆくとともにその一環として昆虫学も萌芽を出したのである。

江戸末期に洋学の知識が入ってくるとともに日本を訪れる欧米人も多くなり日本の昆虫学の発展がこれ等欧米人によってなされるようになった。兵庫即ち神戸も兵庫の港として古く開けたので欧米人の来訪者の多くが兵庫に立寄り或いは滞在して昆虫の採集をしておりその関係で兵庫に関する昆虫の研究も日本の昆虫の研究とはほぼ同じ位の時代から知られていることになる。

そもそも兵庫は古くから務古^{ムコ}の水門^{ミヅカド}或いは大輪田^{オホリタ}の泊の名で知られ(約2~3000年前現在の會下山の南のふもとに栄えた部落がさらにその南の大輪田の泊~大和田の泊~を生み出した。これは播磨五泊の一つとして数えられた)。

1868年12月7日に兵庫開港の名のもとに神戸浦が開港されて世界の港としてスタートした。したがって神戸が中心となって調べられており他の地はほとんど調査の手が及ばなかった。

兵庫の名の由来は大化改新(645年)のとき、兵庫(兵器庫)を設けることを定めたことから起こっているといわれている。大化元年(645年)の考徳紀には「閑曠なるところにおいて兵庫(やぐら)を起造(つく)り、国郡の刀・甲・鞆^{タヌ}を収め聚(あつ)めよ…」とある。

この地に「兵庫」を置いた理由としては海外からの難波船が流れついた場合に対する警備のためや、また畿内と西国街道との重要地点であったため置かれたものと思われる。そして「兵庫」の名が

地名化し、現在の兵庫になったといわれている。兵庫の地名が初めて文献に見られるのは「吾妻鏡」寿永3年（1184年）の条に「兵庫三ヵ庄」と荘園名を記している（『由緒あるまち兵庫』兵庫区役所刊、1975、1988）。

また神戸という名は1879年4月に従来の神戸村と坂本村及び兵庫村が合併したことより始まり、それ以前は神戸町又はその前は神戸村で合併迄は兵庫港の方が有名であった。兵庫港～大輪田の泊は平清盛によって築港工事が営まれて今日の発展の基をつくった。それ故古い文献には神戸より兵庫が出てくるがこの兵庫はやはり現在の神戸市の中の一部であり厳密には湊川より西が兵庫である（慶応3年12月6日兵庫開港の日、当時の兵庫とは湊川——いまの新開地本通り——から柳原の間の海岸地帯で人口約20,000人、戸数5,000余。神戸と呼ばれた地域、いまの中央区には走水、二つ茶屋、神戸の三村合わせて4,000人、1,100戸などが散在していた——故郷燃える、幕末編、のじぎく文庫、1970）

このように日本の昆虫学の基礎が欧米人の来訪によって出来たと同時に兵庫県における昆虫学の基礎もほぼ同じ時代から始まることになる。

そこで兵庫県産昆虫類（主として甲虫類について）の研究の概略を眺めて見ることにする。

江戸末期迄

西欧においては古代ギリシヤに既にアリストテレスのようなすぐれた動物学者が現れ動物を科学的に観察することに成功している。

西欧でも日本でも動物学は医学の発達に伴って興ってきたことは同じである。西欧では顕微鏡の発明により動物学は飛躍的に発達したのに日本では6世紀に中国より伝来した医学の中に本草なる一科があり18世紀になってその中から動物学が育った。本草は勿論中国に起こったものでその基礎を築いたのは江蘇省丹陽府稜陵の人陶弘景であるとのこと。彼によりその頃伝存していた“神農本草經”を基礎として“名医別録”とを合わせて“神農本草經、三卷”更にそれに注を加えて“本草集注”三卷（500年）を作ったが之が日本に来て本草学の母胎となったわけである。昆虫の害は自然の一員として古き人達にも多かれ少なかれ影響を与えたであろうから人間に直接関係のある虫は古い書籍の中にも当然出てくる。

“古事記”は8世紀始め和銅5年に出来上がった吾が国現存の最古の記録である。日本書紀は古事記より8年後、養老4年に完成したもので之等両者の中には昆虫としては僅かにアギズ（蛸蛉）、ハビ（蠅）、シラミ（虱）、カヒコ（蚕）、ハチ（蜂）、アム（虻）の如き非常に身近な虫のみが出てくる。

“風土記”は官撰の郷土誌でそれぞれの動植物を載せている。残念ながら完全に残っているものは

ほとんどない。

“播磨風土記”も完全に現存していない（巻首を欠損し、総記および明石郡の部がなく、巻尾にあるべき赤穂郡も欠くと）、大体動物、鳥の記載は多く虫の名はほとんど出ていない（風土記、東洋文庫、1987）。

“萬葉集”はわが国最古の歌集であり、8世紀より以前4世紀余りの期間にわたって謡まれたものを含み4,500首にあまる長短の歌謡の中、動植物に関するものは可成り多いが昆虫類はやはり身近なものみの様である。出ている虫はハチ、アリ、ハエ、カ、チョウ、ガ、カイコ、クワゴ、カゲロウ、セミ、ヒグラシ、ホタル、コオロギ、キリギリス、トンボである。

正倉院御物又は正倉院宝物として良く知られているものに“玉虫厨子”のあることは有名である。正倉院薬物の中にはミツバチの蜜蠟——蒟蜜、無食子——没食子——インクフシバチの虫瘻、紫鉾——ラックカイガラムシのラック等がある。

中国では4700年前既に養蚕法が知られており、蜜蜂の飼育法、飛蝗の発生、生活、防除法等も3000年位前から知られている。しかし日本でも之等は古くから知られている。養蚕のことが日本の歴史上面に出て来たのは一番古くは雄略天皇の6年（462年）“皇后自ら桑蚕の事を勤めたまふ。スガル（蝶嬴）に命じ国内のコ（蚕）を集めたまふに誤りてワカコ（嬰兒）を集め来たりたるによりチヒサコベ（少子部連）の姓を賜う”とある。その後継体天皇元年（507年）にも農桑を勤めたまうとあり養蚕はその後日本では大いに普及したと考えられる。

恒武天皇の延暦15年（996年）伊勢、三河、相模、近江、丹波、但馬6ヶ国の女2人宛を陸奥に遣はして2年間養蚕法を伝習せしめたという記録もある。

皇極天皇2年（643年）に蜜蜂の巣房四枚、百済太子余豊が三輪山に於いて放ち養いしも繁殖せずというのが養蜂の日本で初めての記録であろう。

^{イナゴ}蝗の大害（之はイナゴだけでなく、メイチュウ、ウンカ等稲の害虫の総称）のことは文武天皇、大宝元年（701）、清和天皇の貞観元年（859）、同16年（874）等々に記録が出てくる。

江戸時代の始め明の李時珍の名著“本草綱目”が伝来した、天下が漸く安定した時でもあり家康の奨学の政策と相まって本草学はここに学術として発足した。

この“本草綱目”は日本の本草家や博物学にとって聖典として珍重されそれぞれが基となって貝原益軒著“校正本草綱目”（1673）、稻生若水著“新校正本草綱目”（1714）、寺島良安著“和漢三才図会”（1713）、小野蘭山著“本草綱目啓蒙”（1803）等の名著が出てきた。

八代将軍吉宗の時代、所謂の享保時代（1716～1745）以前の主なる本草学者は京都にいた。ただ貝原益軒のみは福岡に住んだ。その当時吉宗は国産開発を奨励して各地に採薬使が派遣され薬用植物を主とする調査が行われた。之に刺激された全国各地各藩にその地方の動植物や鉱物などを調査しよう

という機運が著しく勃興した。この“産物御尋”によってわが国各地の動物相や植物相が著しく明瞭の度を増したことはたしかである。

各地の産物の報告書、目録帳、主要産物の絵図帳などは追々幕府に提出された。現在残っているのは極めて少ないがその中に兵庫に関するものは次の如きものが記録として残っているがその内容は全くわからない。“播州網干産物之内繪図註書”（浅岡新兵衛）（元文2年、1737）。

その頃から本草学者が集まって動植物あるいは鉱物などの品類を陳列して学者相互の研究に資し、あるいは一般民衆にそれら天産物の知識と趣味とを普及するのを目的とした物産会が始まった。

物産会は専ら江戸で開かれた（神田、本郷、湯島等）、第5回の会（宝暦12年）には一般の人の出品をつのり“撰津、播磨”からも出品があったと記録があり、それと相前後して大阪でも京都でも物産会は開催されている（文政甲中、1824、岩崎常世著“武江産物誌”は1967年上野益三博士によって覆刻されている）。

この時代の諸侯には博物学を好み、自ら著述を行い、動植物を写しあるいは画家をして寫生させたのが少なかった。熊本藩主、細川越中守重賢（銀台侯）は各地の動植物の写生図をつくること夥しくその内の一つ“虫類生与”は明和2年東山道通過の時の写生が多く中に“播州のとんぼう”というのがある（本書は1969年細川家名宝展として宝塚ギャラリーで展示され見る機会を得た）。この物産会から本草学あるいはそれ以外の文学書、史書類の群籍に現れた動植物などの名称が何物を指すかを考証するのが名物学であり主として有用動植物や鉱物などをしらべ進んでその栽培養殖の方法や利用などを考究する、又ある特定の地方の動植物の種類や効用などを調べあげること等を物産学といった。

文化文政以後江戸の博物学は益々隆盛の域に達し動物のみを研究する学者が現れるようになった、それに対抗するように名古屋にも一派（尾張学派）が出て斯学の研鑽につとめた。それ等の内有名な書としては水谷豊文の“虫譜”（昆虫、直翅目75種、鞘翅目約60種、半翅目約30種）、動物分類学の基礎として生物分類の基本を種なる概念におくとした伊藤圭介著“泰西本草名疏”3巻（文政12年）、大河内存眞著“虫類写集”、吉田雀巢庵（平九郎）の“虫譜”特に“蜻蛉譜”栗本丹州著“虫譜”（所謂栗氏虫譜、栗氏千虫譜、丹州虫譜、文化8年、1811年ともいわれている）、飯室楽圃著“虫譜図説”12巻（安政3年丙辰、1856年）等々がある（南山公・島津重豪にも“薩州虫品”と云う著作があると。柏原精一、科科朝日、1989）、さらに大阪に生まれた一博物研究家堀田龍之助と云う人が嘉永6年癸丑（1853）5月11、12日大阪で岩永文禎の玄昌堂物産会が開催されそれに多数の蒐集品を出品したとしてその当時の品目からそれを写されているのを見るとコガネムシだけでも9種程出品されており中には“五分セミ 武庫川”と産地名も入っていたりする。多くの昆虫が出品されたことがわかる。ただこの昆虫がどのような体裁で出品されたのか知り得ないし、その標本も残っていないのは残念である。だがその当時町の研究者でそのような標本をこしらえ一般に展示すると云った様なこ

とをした人がいたと云うことは大変興味がある（上野益三，博物学者列伝，1991）。

そしてこの頃より外国人の日本訪問が始まると共に Linné の分類による影響も出て次第に動物学より別れて昆虫学として独立した学科としての道を始めることになる。

（追記）最近小西正泰博士著“昆虫採集の歴史”（虫の文化誌，朝日選書，1992）を拝見しているとその中で（p.37）“「石の長者」木内石亭は「雲根志・前編巻3，1773年」のなかで「摂津有馬愛護山で拾ったアリの化石三個を持ってきて見せてくれた人がある。それで翌年そこにいて4，5人で終日さがしたが見つからなかった」とのべている。これは昆虫の化石について日本で最初の記事であらう”と述べられている。甲虫ではないが昆虫化石に関心をもたれ有馬あたりで採集された記録がその頃既にあったことがわかり大変参考になった。

兵庫県のアリモドキ

（ 兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 6 6 ）

高 橋 寿 郎

アリモドキ科（Anthicidae）は古くイッカクチュウ科と云われていた。この科に属するあるグループのものにつけられた名を科の呼び名に使用してこれは不適當であると三輪勇四郎博士は名著“日本甲虫分類学”（1938）の中で言及されている。

野村 鎮氏はこの科のものの特徴からアリモドキ科が適當であるとの科名を提唱された（自然の観察 11号，p. 2-4，1960）。その後現在にいたるまでこの呼び方が使用されている。

日本産のこの科のものは1989年の平嶋義宏博士監修の“日本産昆虫総目録・I”によると3亜科12属62種となっている。

日本で始めてこの類の研究発表があったのは1876年の Marseul の論文だろうと思われる（Ann. Soc. Ent. France 6(5)：447-486）。この論文は G. Lewis の採集品に基づいたもので19の新種並びに4種の記録種（No.92-109）が発表されている。

その後 G. Lewis 自身が日本産アリモドキ科の報告をまとめられている（Ann. Mag. Nat. Hist., 10(6)：422-450，1895）。その中では1新属，16新種，11種の記録が記載されているがp.445-446

に当時の日本の Pedilidae として19種 Anthicidae として30種を目録として発表している。したがってこの2人によって日本のアリモドキ科の概要はまとまった状況になっている。

日本人によるこの類の研究は野村 鎮氏によって手がつけられ氏によりいくつかの報文の発表をみた(1960, 1961, 1963, 1964, 1970)。

1983年には中根猛彦博士が日本産クビボトムシ類をまとめられて4新種の記載をされている(北九州の昆虫 Vol. 30, No. 1, p. 1-6, pl. 1)。

1985年酒井雅博氏は日本産47種を原色で図説された(原色日本甲虫図鑑・Ⅲ)。これによって本科の同定もある程度やり易くなった。その後同氏は硫黄島からの1新種の記載をされると共に数種のこの科のものの属名の変更を発表しておられる(Trans. Shikoku Ent. Soc. Vol. 17, No. 4, pp. 247-251, 1986)。さらに多比良嘉晃氏は静岡県の本科のものをまとめられ(静岡の甲虫 Vol. 1, No. 2, p. 13-26, 1982)、今坂正一氏は島原半島のアリモドキ科並びに分布資料を発表しておられる(北九州の昆虫 Vol. 30, No. 3, p. 145-150, 1983)。それぞれの報文ともこの仲間の同定に非常に重要な参考文献である。

兵庫県下のこの科の資料は残念ながら大変少ない。そこである程度同定が出来る種に就いてを中心に分布を記録しておく程度の報告をしておきたいと考える。まだまだわからないものもいるのだからいづれ之等は機会を見て次報以後に発表させて頂き度いと思う。

Family Anthicidae アリモドキ科

Subfamily Anthicinae アリモドキ亜科

Tribe Notoxini

1. *Mecynotarsus minimus* Marseul, 1876 チビイッカク

Marseul により "Nagasaki, Hiogo" 産で記載された。河原とか海岸で採集出来るとのことであるが兵庫県下ではほとんど記録が無い注意が足りないと考える。

トカラ諸島、奄美大島、徳之島には亜種 ssp. *laticornis* Nomura を産する。

産地: Hiogo [Marseul, 1876, Nomura, 1960]*神戸市白川 (lex., 11-X I 1978)

Tribe Anthicini

2. *Formicomus braminus coiffaiti* Bonadonna, 1964 ホソクビアリモドキ

*産地の所で [] のものは記録の引用, () のものは筆者採集, 標本所有のもの。

本種の学名は従来 *Formicomus braminus* Kreikich-Strassold が用いられていたが酒井雅博氏によると (1985) インドに産する *Formicomus braminus* Lafarte が原亜種で日本に産するものは ssp. *coiffariti* Bonadona となり対馬産は ssp. *can dens* Kreich-Strassold となるが再検討が必要とされている。一応ここでは酒井氏の学名を用いておいた。

湯浅啓温・河野広道両博士によると (日本昆虫図鑑, p. 1185, f. 3405, 1950) 春から夏にかけて各地にきわめて普通であると記されている。野村 鎮氏も原色で図説され (1963), 3月下旬~11月上旬河原や砂浜で見られるが花にも来るし, 灯火にも飛来すると記しておられる。また酒井雅博氏も原色で図説, 普通種とされている。更に多比良氏も4~11月に樹葉や bush の beating によって採集出来る, 初冬には落葉下から得られることもあると記しておられる (1982)。

♂では前腿節前縁に歯状突起を有し, 第7腹板後縁が広く三角形に湾入して生殖器が露見している。

多くの書に普通種と説明されているにもかかわらず県下ではそれ程多く見られなかったが城崎郡日高町奈佐路では葉上に多く見られた。

産地: 三原郡福良 [久松, 1973]。飾磨郡家島 (1♀, 26-V-1978)。出石郡出石町荒木 [高橋, 1983]。豊岡市内 [高橋, 1975]。城崎郡日高町奈佐路 (2♂, 5♀, 3-X-1985, 1♀, 25-X-1985, 2♂, 1♀, 22-V-1986)

3. *Anthelephila imperator cribriceps* (Marseul, 1876) ケオビアリモドキ

Marseul により "Nagasaki, Hiogo" を産地に記載された種である。中根博士によると始め独立種として記載されたがその後 *Anthelephilum imperator* La Forté-Sénectere のシノニムとして扱われている。日本産は多少南方産と異なる点も認められるので一応亜種として認めておきたいと (北九州の昆虫 Vol. 23, No. 3, p. 68, 1977)。

兵庫県下では大変少ない。野村氏によると砂丘で採集したと。かつてヤマトイッカクと呼ばれていた。

産地: 三原郡福良 [久松, 1973]。Hiogo [Marseul, 1876. Nomura, 1960]。神戸市烏原 (1♂, 21-III-1974)

4. *Pseudoleptalus trigibber* (Marseul, 1876) ミツヒダアリモドキ

Marseul により "Nagasaki, Hiogo" 産で記載された。前胸背の前方は三葉状, 後方は瘤状である。体長2.3-2.7mm。ミツヒダイッカクと呼ばれていた。

神戸市内で7月4—10日頃葉上に極めて多い。

産地：川西市大和〔仲田, 1970, 1978, 1982〕. Hiogo〔Marseul, 1876. Nomura, 1960〕. 神戸市谷上 (lex., 23-VII-1970), 烏原 (4exs., 4-V-1982, 9exs., 5-VII-1982, 2exs., 9-VII-1982, lex., 13-VII-1982, lex., 19-VI-1983, 2exs., 22-VI-1983, lex., 30-VI-1983, lex., 2-VIII-1983, lex., 13-VII-1983, lex., 11-VII-1984, lex., 22-VI-1990, 3exs., 9-VII-1990), 逢山峽 (lex., 27-VI-1987), 伊川谷 (2exs., 22-V-1988), 多井畑 (lex., 19-VI-1990, lex., 26-VII-1990). 三木市口吉川町 (2exs., 3-VII-1986). 加西市畑 (lex., 29-VI-1974). 小野市山田 (3exs., 18-VI-1987)

5. *Pseudoleptaleus valgipes* (Marseul, 1876) ヨツボシホソアリモドキ

Marseul によって“Japan”を産地に *Anthicus* 属で記載された。

♂後脛節内縁は弓状に湾曲する。♀後脛節内側もかすかに波曲する。♂腹部末節（第7腹板）後縁は中央が軽く湾入しその前方は弱くくぼむ。♀は単純。

本種は酒井雅博氏によって頭部が不完円形であり前胸背長くそして隠れる。上翅基部近くが平圧されている特徴から *Pseudoleptaleus* 属に移さるべきであると処理 (1986) され原色日本甲虫図鑑でもその様に扱っておられる (1985. 命名者 Lewis と間違っている)。

多比良嘉見氏によると日本産アリモドキ中最も普通のもので、畑地や道路脇に積んである刈草やワラ束などから採集され、燈火にも飛来するが個体数の多い割合にはあまり見かけないと記しておられる (1982)。

県下でも広く産するようである。生活史などよくわからない。

産地：川西市大和, 笹部〔仲田, 1978, 1982〕. 伊丹市〔河上, 1984〕. 宝塚市内 (lex., 10-IV-1958). 神戸市山の街 (lex., 1-VI-1958), 藍那 (1♂, 1♀, 27-VI-1978). 明石市林崎 (1♂, 13-IV-1983, 1♂, 30-V-1983). 三木市口吉川笹原 (2♂, 4♀, 3-X-1986). 美嚙郡吉川 (lex., 19-IX-1985), 龍野市神岡町 (1♂, 6♀, 14-IX-1988). 赤穂市天和 (3♀, 6-X-1974). 氷上郡〔山本, 1958〕. 城崎郡円山川堤〔高橋, 1975〕

6. *Anthicus baicalicus* Mulsant, 1866 クロホソアリモドキ

Lewis が“Kobe, Odawara, Yokohama, Kawasaki, Niigata, Hakodate”を産地に *A. baicalicus* Mulsant var. *niponicus* として記載したのが日本からの初めての記録である (1895)。

体黒色で灰白色をやや密生している。砂浜や河原で得られる種である。兵庫県下でも海岸の砂地帯,

河原に割合いるように思われる。

産地：川西市大和〔仲田, 1979, 1982〕。伊丹市〔河上, 1984〕。宝塚市武庫川川原 (4exs., 24-IV-1983)。Kobe [Lewis, 1895, Nomura, 1961]。姫路市白浜の宮 (2exs., 20-IX-1979)。豊岡市内〔高橋, 1976〕

7. *Anthicus confucii* Marseul, 1876 ウスモンホソアリモドキ

Marseul によって“Hiogo, Nagasaki”を産地に記載された。分布は広いようで日本以外台湾、満州、スマトラが産地として知られている。トカラ諸島宝島に分布するものは *subsp. tokaransis* Nomura という。

灯火に飛来すると云われるが多比良氏によると畑地の脇に積んであるワラ、刈草、堆肥などを探すとまとまって採れることが多いと記しておられる (1982)。

県下での分布はそれ程知られていない。

産地：三原郡阿万西町〔久松, 1974〕。川西市大和〔仲田, 1978, 1982〕。Hiogo [Marseul, 1876, Nomura, 1961]。多可郡白山 (lex., 27-V-1973)

8. *Anthicus floralis* (Linnaeus, 1758) アトグロホソアリモドキ

世界共通種であるとのこと。灯火に飛来すると云われているが兵庫県下での記録は必ずしも多くない。

産地：川西市大和〔仲田, 1970, 1978〕。神戸市烏原 (lex., 1-IX-1967)。出石郡出石町材木〔高橋, 1963〕

9. *Anthicus fugiens* Marseul, 1876 アカホソアリモドキ

Marseul によって“Nagasaki”産で記載された種である。上翅に黄褐色の4紋がある。♂の上翅両側に凹陷があり、その中に褐色毛が生えている。兵庫県下には割合いるようである。

産地：川西市笹部〔仲田, 1979〕。西宮市船坂 (1♀, 5-VI-1987)。相生市三濃山 (4♀, 1-VI-1974)。佐用郡大撫山 (1♀, 25-IV-1976)。宍粟郡音水 (1♂, 11-VI-1972, 1♀, 13-V-1973, 1♀, 3-VI-1973)。養父郡氷の上〔高橋, 1975〕

10. *Anthicus laevipennis* Marseul, 1876 ツヤチビホソアリモドキ

Marseul によって“Nagasaki”産で記載された。河原の石上などにいるとなっている。野村 鎮氏 (1963), 酒井雅博氏 (1985) のそれぞれ原色図説がある。

兵庫県下での記録は次のものを知るのみである。

産地：出石郡出石町荒木 [高橋, 1963]

11. *Anthicus lepidulus* Marseul, 1876 ウスイロホソアリモドキ

Marseul により“Nagasaki, Hiogo”産で記載された。その後の記録が全く無い。

産地：Hiogo [Marseul, 1876]

12. *Anthicus monstrosicornis* Marseul, 1876 ヒゲブトホソアリモドキ

Marseul により“Hiogo, Nagasaki”産で記載された。♂触角第 5, 6 節が三角形に広がる点で他種と容易に区別出来る。

産地：三原郡阿万西町 [久松, 1974]。Hiogo [Marseul, 1876]。明石市大久保 (1♀, 13-IX-1964)

13. *Anthicus perileptoides* Lewis, 1895 ヒラタホソアリモドキ

Lewis により“Kobe”産で記載された種。

海岸や河原の石の下などにいる種とのことであるが原記載以後県下での記録が見られない。

産地：Kobe [Lewis, 1895. Nomura, 1961]

14. *Anthicus pilosus* Marseul, 1876 コクロホソアリモドキ

Marseul によって“Hiogo”産で記載された種である。余り多いように思われぬ。

産地：川西市大和 [仲田, 1970, 1978]。Hiogo [Marseul, 18876]。神戸市藍那 (lex., 3-V-1962)。美方郡浜坂 [高橋, 1975]

15. *Anthicus protenus* Marseul, 1876 クロオビホソアリモドキ

Marseul により “Nagasaki” 産で記載された種 (1876) .

県下での産は余り知られていない.

産地 : 川西市一庫～猪名川町民田 [仲田, 1982] . 宍粟郡音水 (lex., 31-V-1970) .

16. *Anthicus scoticus* Marseul, 1876

Marseul により “Nagasaki, Hiogo” を産地に記載された種である. その後の記録を知らない.

産地 : Hiogo [Marseul, 1876]

17. *Anthicus tobias* Marseul, 1879 タナカホソアリモドキ

野村 鎮氏が東京産で記載された *A. tanakai* Nomura (Entom, Rev. Japan, Vol. 11, No. 2, p. 48, Fig. 2, 1960) , さらに原色で図説された (1963) ものがこの種にあたと (Nakane, T., Anonym. Icon. Ins. Jap. col. nat. ed. II, addenda et corrigenda, 1978) . 酒井雅博氏も原色で図説されている (1985) .

県下での記録はほとんど知られていない.

産地 : 神戸市須磨・白川 (lex., 19-IX-1978)

18. *Anthicomorphus niponicus* Lewis, 1895 クロチビアリモドキ

Lewis によると *Anthicomorphus* 属 3 種のものより広く分布しているとされている. 分布は日本全国であるがどうしたものか県下の記録が従来全くなかった種である.

産地 : 氷上郡山南町 (lex., 6-IX-1990)

19. *Anthicomorphus puberulus* (Marseul, 1876) クロオビチビアリモドキ

Marseul により “Japan” を産地に記載された. 後 Lewis は “Kobe, Maiyasan” を記録した. それ以後の記録が県下で全く無い.

産地 : Kobe, Maiyasan [Lewis, 1895]

20. *Anthicomorphus suturalis* Lewis, 1895 ヘリアアカアリモドキ

Lewis により “Oyayama, Miyanoshita, Tsukubayama, Kashiwagi” を産地に記載された。
県下では氷の山の記録があるだけである。

産地：養父郡氷の山 [2exs., 15-K-1973, K. Tsuji leg.]

21. *Sapintus cohaerus* (Lewis, 1895) ムナグロホソアリモドキ

Lewis により “Yokohama, Kobe on Maiyasan, Usui-toge” を産地に記載された種である。

黒色の上翅に黄赤褐色の4紋を有し、体長3.8-4.3mmでやや大きく、♂は前腿節基部下面には針状の棘突起を有し、後腿節は中央に向かって弱く拡がりその後は平行、多少とも偏平となって明らかに上反する。♀は単純である。

酒井雅博氏は上翅に立った感覚毛以外に後方に向く長毛と後側方に向く微毛をそなえている特徴から *Anthicus* 属の5種(本種もふくむ)を *Sapintus* 属に移された(1986)。既に同氏による原色図説でもそのように変更されている(1985)。

産地：川西市大和、笹部 [仲田, 1970, 1978, 1982]。Kobe on Maiyasan [Lewis, 1895. Nomura, 1961]。神戸市烏原 (1♂, 1-IX-1974), 藍那 (1♂, 9-VII-1979), 押部谷木見 (1♂, 3♀, 23-VI-1980)。三木市細川中 (lex., 30-V-1985)。多可郡三谷 (2♂, 2♀, 2p-IX-1974)。宍粟郡音水 (1♂, 11-VI-1972), 赤西 (1♀, 9-IX-1978, 1♂, 3-VI-1979, 1♂, 23-VI-1979), 坂の谷 (1♀, 22-VII-1979)。美方郡扇の山 [高橋, 1975]

22. *Sapintus litorsus* (Lewis, 1895) クロホシホソアリモドキ

Lewis により “Hakodate” 産で記載された。砂丘や河原で得られるとのこと。日本の北半には多くいる種のようなものである。今の所県下では次の地点での記録があるのみ。

産地：宍粟郡赤西 (lex., 9-IX-1978)。出石郡弘原 [高橋, 1965]

23. *Sapintus marseuli* (Pic, 1893) アカモンホソアリモドキ

Marseul が *A. scoticus* として “Nagasaki, Hiogo” 産で記載された種(1876)をPicが上記の名前に改められた (Ann. Soc. Ent. Fr., LXI, 1892 (1893), P. CCXI)。

♂前腿節基部下面は弱い鈍突起を具え、觸角第8，9節は♀のそれより長いことで♀と区別出来る。

朽木，倒木，薪などに集まる種で県下でも広く産するようである。

酒井雅博氏により *Sapintus* 属の種として扱われている（1985，1986）。

産地：川辺郡猪名川町槻並（1♂，1♀，4-V-1979）。川西市大和〔仲田，1978，1982〕。西宮市船坂（lex.，5-VI-1987，2exs.，11-VI-1987）。Hiogo〔Marseul，1876. Nomura，1961〕。神戸市藍那（3♂，5♀，9-VII-1979），押部谷木見（1♀，24-VIII-1980）；森林植物園（1♀，14-VI-1986）。多可郡三谷（1♀，8-VI-1975，1♂，26-VIII-1975）。小野市山田（lex.，24-IX-1987）。美囊郡吉川町（1♀，11-VII-1985）。加東郡社町三草（lex.，22-V-1989）。宍粟郡赤西（1♂，3-VI-1979，4♂，3♀，23-VI-1979）。水上郡〔山本，1958〕。城崎郡日高町奈佐路（1♂，1♀，25-X-1985，1♂，2♀，22-V-1986）。養父郡氷の山（4exs.，25-VII-1959）。美方郡扇ノ山〔辻，1963.，高橋，1975〕

24. *Derarimus clavipes* (Champion, 1890) セマルツヤアリモドキ

Champion が G. Lewis 採集 “Osaka, 8-VII-1891” 産で記載された種。

1895年には G. Lewis が摩耶山上の寺近くの大変腐った枯葉の下から1881年6月8日5頭得たと囃入りで報告されている。尚この種については宮武陸夫博士が大変詳しく囃入りで解説しておられる（1959）。

本種の分布の太平洋側の東限は小田原附近で日本海側は石川県あたりと平野幸彦氏は報じておられる（1984）。穂積俊文氏も従来の日本での分布をまとめると共に新たに長野県を記録された（1986）。酒井雅博氏は南部インド産で Bonadona が創設した *Derarimus* 属に移すべきである（1986）とされているので此処ではそれに従った学名を用いておいた。

兵庫県下からは上記 Lewis 以後の記録が見当たらない。

産地：Kobe, Maiyasan [Lewis, 1895]

Subfamily Macratriinae クビボソムシ亜科

25. *Macratria cingulifera* Marseul, 1876 オビクビボソムシ

Marseul によって兵庫産で記載された種であるがその後の記録が全くない。

Lewis は1895年に Marseul の記載された標本を返して貰っていない（記載に用いたのは G. Lewis の採集品である）。その後他にこの種の標本を見ていない。それ故タイプはパリ博物館に保管さ

れていると考えられ標本としてはこれしか無いと記している。

産地：Hiogo [Marseul, 1876. Lewis, 1895]

26. *Macratia japonica* Harold, 1876 キアシクビボソムシ

Harold が日本産で記載された (Deutch. Ent. Zeit., p.350, 1877). その後 Lewis は産地を次のごとく記録した "Yamaguchi (Hiller leg.), Yokohama, very common in winter under loosened bark of *Zalkowa Kaaki*, Sieb. Also at Ichiuchi Numata and Niigata".

兵庫県下での記録はそれ程多くないがもっと広く分布しているように思われる。

産地：神戸市逢山峡 (lex., 17-V-1985). 宍粟郡音水 (lex., 11-VI-1972). 氷上郡 [山本, 1958], 山南町 (lex., 6-IX-1990). 養父郡氷の山 (2exs., 27-VII-1956, lex., 21-VII-1958). 美方郡扇ノ山 [辻, 岸田, 1972]

27. *Macratia serialis* Marseul, 1876 アカクビボソムシ

Marseul によって "Hiogo, Mai-ya-san" 産で記載された種である。兵庫県下には割合いるように思うのだが多比良氏は本州からの本種の記録はあまり無いようだと記しておられる (1982)。

産地：川西市大和, 笹部 [仲田, 1978, 1982]. Hiogo, Mai-ya-san [Marseul, 1876]. 神戸市藍那 (lex., 14-VII-1978), 烏原 (lex., 30-VI-1983, lex., 2-VII-1983, lex., 26-VII-1983, lex., 3-VIII-1983). 三木市口吉川町 (lex., 3-VII-1986, lex., 14-VII-1986). 美嚢郡吉川町 (lex., 27-VI-1985). 小野市山田 (lex., 8-VII-1987). 宍粟郡水谷 (lex., 17-VII-1981). 養父郡氷の山 (lex., 2-VII-1959)

以上兵庫県産アリモドキ科27種を記録した。調査が充分出来ていないグループだけにより一層の努力をしなければいけないと考えている。まだまだ分布している種もあるだろうし各種に就いての産地も可成り増加することだと思っている。

参考文献

参考文献は多くあるが本報文をまとめるに当って参考にしたもののみにとどめた。県関係の文献は拙編の目録を見て頂きたい。

- 福田 彰, 1958. 日本産甲虫類生態ノート. (II). 新昆虫 11(4) : 43—45.
- 福田 彰, 1959. 日本産甲虫類生態ノート. (III). 新昆虫 12(1) : 5
- 福田 彰, 1959. 日本幼虫図鑑 (北修館)
- 林 長閑, 1980. 枯木に生息するヒラタムシ上科 (鞘翅目) の幼虫の同定手びき. 日本私学教育研究所調査資料(72) : 1—53, 53pls. (ref. p. 51, pl. 50)
- 平野幸彦, 1981. 神奈川県 of 甲虫 アリモドキ科. 神奈川県昆虫調査報告書. p. 338—339.
- 平野幸彦, 1983. セマルツヤモドキの分布. 甲虫ニュース(61) : 5.
- 平嶋義宏監修・九州大学農学部昆虫学教室・日本野生研究センター編集, 1989. アリモドキ科. 日本産昆虫総目録・I : 411—413.
- 穂積俊文, 1986. セマルツヤアリモドキの採集. 昆虫と自然 21(14) : 31.
- 今坂正一, 1984. 鳥原半島の甲虫相(IV)アリモドキ科. 北九州の昆虫 30(3) : 145—149.
- 今坂正一, 1984. 日本産アリモドキ科分布資料(1). 北九州の昆虫 30(3) : 150.
- Lewis, 1895. On the Cistelidae and other Heteromeraus Species of Japan. Ann. Mag. Nat. Hist., xv(6) : 422—450.
- Marseul, M., 1876. Coleopteres du Japan recveillus par M. Georges Lewis. Enumeration des Heteromeres. Ann. Sor. Ent. France 6(5) : 447—486.
- 三輪勇四郎, 1938. 日本甲虫分類学. (西ヶ原刊行会)
- 宮武睦夫, 1959. 興味あるイッカクチュウ科甲虫の1種の記録によせて. あげは(7) : 30—31.
- 中根猛彦, 1983. 本邦産のクビボムシ類について (アリモドキ科). 北九州の昆虫 30(1) : 1—6, pl. 1.
- 中根猛彦, 1988. 日本の雑甲虫覚え書 2. 北九州の昆虫 35(1) : 1—6.
- Nomura, S., 1960. Two new species of the genus Anthicus from Japan (Coleoptera : Anthicidae). Entom. Rev. Japan 11(2) : 47—48.
- 野村 鎮, 1960・1961. アリモドキ科覚え書 (I・II). 自然の観察(11) : 2—4. (15) : 2—4.
- 野村 鎮, 1963. 原色昆虫大図鑑, 第二巻 (甲虫編) (北隆館)
- 野村 鎮, 1970. 日本産異節類甲虫の分布資料. 昆虫学評論 22(2) : 101—107.
- Pic, M., 1911. W. Junk Coleop. Cat. Pars. 36 : Anthicidae.
- 酒井雅博, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III). pl. 71—72. p. 415—423 (保育社)
- Sakai, M., 1986. Studies on Anthicidae of Japan (Coleoptera) I. Trans. Shikoku Ent. Soc. 17(4) : 247—251.

多比良嘉晃, 1982. 静岡県に産するアリモドキ科の甲虫. 静岡の甲虫 1(2) : 17—26.

Yawata, H., 1944. Description d'une espece nouvelle Appartenant an Genre Anthicus du Japan
(Col. Anthicidae). Trans. Kansai Ent. Soc. 14(1) : 1—2.

(I · 1992)

尼崎西南部の昆虫(その6)

新 家 勝

Ⅶ Coleoptera 鞘翅目 (続き)

11. Cerambycidae カミキリムシ科

- (1) *Megopis sinica* White ウスバカミキリ
1947, 7, 11.
素盞鳴神社のアキニレにいたもの。
- (2) *Prionus insularis* Motschulsky ノコギリカミキリ
1950, 6, 26.
- (3) *Spondylis buprestoides* Linne クロカミキリ
1947, 6, 1.
- (4) *Macroleptura regalis* Bates オオヨツスジハナカミキリ
1947, 7, 11.
- (5) *Xystrocera globosa* Olivier アオスジカミキリ
1947, 6, 29.
- (6) *Stenygrinum quadrinotatum* Bates ヨツボシカミキリ
1944, 6, 29.
- (7) *Leontium viridae* Thomson ミドリカミキリ
1944, 6, 20, 1946, 5, 21.
庭のセンダンやオオイボクの花によく飛来した。

- (8) *Palaeocallidium rufipenne* Motschulsky ヒメスギカミキリ
1944, 4, 15, 1947, 5, 20.
- (9) *Rhaphuma annularis* Fabricius タケトラカミキリ
1945, 8, 3, 1944, 8, 26.
物干竿, すだれの骨材など竹製品からよく発生していた.
- (10) *Rhaphuma japonica* Chevrolat エグリトラカミキリ
1947, 6, 20.
- (11) *Gramographus notabilis* Pascoe キイロトラカミキリ
1947, 6, 23.
- (12) *Dere thoracica* White ホタルカミキリ
1944, 5, 5. 2 EA.
- (13) *Purpuricenus temminckii* Guérin-Méneville ベニカミキリ
1944, 5, 15, 1943, 5, 17, 1947, 5, 11.
- (14) *Anoplophora maraciaca* Thomson ゴマダラカミキリ
1947, 8, 1.
サクラ, ヤナギ類, センダン, アラガシ, カキなどでよく見られた.
- (15) *Monochamus alternatus* Hope マダラヒゲナガカミキリ
1948, 6, 5.
北隆館 日本昆虫図鑑のカラー図版にマツノトビイロカミキリという名でのっていた垂涎
的. 松枯れの脇役として, 憎まれ者になることは夢にも考えられなかった.
1頭採集したのみ
- (16) *Batocera lineolata* Chevrolat シロスジカミキリ
1944, 7, 12.
自宅前のシダレヤナギで1頭採集したのみ.
- (17) *Apriona japonica* Thomson クワカミキリ
1947, 6, 2.
民家に栽植されているイチジクに多かった.
- (18) *Pterolophia rigida* Bates アトモンサビカミキリ
1949, 9, 20, 1950, 5, 13.
- (19) *Oberea japonica* Thunberg リンゴカミキリ
1945, 6, 25.

庭のサクラでよく発生していた。

12. Chrysomllidae ハムシ科

- (1) *Oreina aurichalcea* Mannerheim ヨモギハムシ

1945, 6, 6.

- (2) *Chrysomela vigintipunctata* Scopoli ヤナギハムシ

1944, 6, 10.

- (3) *Aulacophora nigripennis* Motschulsky クロウリハムシ

1944, 6, 12, 1949, 6, 14.

ウリハムシもナンキン, キュウリ, ヘチマ等に非常に多かった。

- (4) *Cassida piperata* Hope ヒメカメノコハムシ

1950, 5, 7.

これらのほか, サツキに *Chlamisus* 属のハムシが多産した。多分ムシクソハムシであろう。

13. Curculionidae ゾウムシ科

- (1) *Macrocorynus variabilis* Roelofs オオクチプトゾウムシ

1944, 6, 10.

- (2) *Lixus acutipennis* Roelofs ハスジカツオゾウムシ R.

1949, 10, 17.

- (3) *Anthonomus bisignifer* Schenkling イチゴハナゾウムシ R.

1947, 6, 20.

- (4) *Hyposipalus gigas* Fabricius オオゾウムシ R.

1946, 6, 26.

Ⅷ まとめ

もともと、単に虫好きの少年が、目についた昆虫だけを採集していたものであって、専門的な調査をしたのではないから、不十分な浅薄なデータであるうえ、標本の大半を失った後に取り纏めたのであるから、極めて貧弱なものになってしまった。しかし、当時のこの地域で普通に目に付く昆虫たちを大体、知ることができると思う。そして、阪神間近郊の田園地域ならどこでも、この程度の昆虫が普通におり、どことも似たようなものであったと思う。しかし、阪神間ではこの地域はもちろんのこと、もっと広範囲が市街化したので単に昆虫の生活場所が狭められただけでなく、化学洗剤の普及や下水道の完備してない地域での尿尿浄化槽からの放流による水質の変化、薬剤撒布や排気ガスによる大気の成分変化などのため、現在では到底これだけの昆虫は見られない。ただ、1989年は7月と9月

に素盞鳴神社を訪ねたところ、アゲハ・アオスジアゲハが舞い、虫籠にコフキコガネなどを入れた子供たちがシオカラトンボを追いかけていた。やっぱり「宮さん」には虫がいる!!意外に昆虫がいるのを再認識した次第である。適応性や生活力の強い一部の昆虫だけが、僅かに取り残された社寺林や公園、堤防などを中心に、一部は民家の庭先などで力強く生きのびているのが現状だろう。

参考文献

- 北隆館 日本昆虫図鑑
- 北隆館 原色昆虫大図鑑 I, II, III
- 保育社 原色日本昆虫図鑑 下
- 関西トンボ談話会 近畿のトンボ
- 昆虫界 Vol. IX
- 日建測量社 最新尼崎市街地図

街に住みついたツマグロヒョウモン

新家 勝

阪神間の背山、つまり六甲山系から長尾山系、さらに能勢にかけての低山地には、クモガタ、ミドリ、メスグロ、ウラギンスジ、オオウラギンスジ、ウラギン、ツマグロの7種のヒョウモンチョウが生息している。昔はオオウラギンもいたそうだが、近年、見られないようである。これらのヒョウモンチョウは、ツマグロを除き、普通は平地に下りてこず、まして平地の市街地に現われることは滅多にない。ツマグロヒョウモンも、主に丘陵地の草原や山上などで見られるが、平地では、秋に南下する個体が河川敷や運動場などを飛んで行くのが時々見られる程度であり、市街地では滅多に見られなかった。ところが、ここ3、4年、平地の市街地やその周辺でよく目につくようになってきた。どうも、近年様子が変わってしまったらしい。

他のヒョウモンチョウと異なり暖地性であるツマグロヒョウモンは、飛び方は暖慢、ことに雌は前翅端が黒色で斜の白色帯があるため、一見カバマダラではないかと思うことがある。また、雌雄の色

たが、同町内をうろついており、時には自宅のアペリアの花を吸蜜に来た。

同年9月15日、セイトカアワダチソウの花期ではないのに宝塚市武庫川町から美座2丁目にかけての武庫川川原のあちこちで目撃したが、ヤブカラシの花で吸蜜するものがいた。

そして、9月中旬、西宮市南郷町の知人から今年も同じ空地に昨年と同じ幼虫がいるとの知らせがあったので、9月22日に見に行った。現場は住宅を取り壊した跡の空地で、広さ約90㎡、南北及び西は人家に囲まれ、東側は金網のフェンス越しに路地に面した、風当りの少ない陽地である。表土は砂混じりで瘦地、草取りをしてあるため背丈の高い草はなく、スマレ、シロバナスマレ、フモトスマレ、ドイツスマレ（ドイツ産のスマレであるとのことだが、浅い切れ葉のスマレで園芸や外来植物の図鑑を見てもでてこないで、以下、仮にドイツスマレと呼ぶ）など多種のスマレ類のほか、ツユクサ、ハハコグサ、ニシキグサなど背丈の極めて低い草本と苔類が生え、また周囲にはハマアザミ、ヒオオギ、ヤブラン、イノモトソウ程度の背の低い草本が、いずれもまばらに生えている。また、元は植込みであった部分には、アラガシ、サザンカ、ナンテン、ヒイラギナンテンなどの樹木も生えている。そして、いたのは正にツماغロヒョウモンの幼虫であった。幼虫は大体3～4cm、4～5令と思われたが、ざっと数えて30頭、スマレだけでなく、苔の上、砂の上、スマレ類以外の草の根元などにもおり、後者の方がスマレ類にいるものより多かった。但し、どの種のスマレにも食痕があった。

次に、約2週間後の10月10日、カメラを持って同所を訪れたところ、幼虫は大きいものは4.5cmに成長しており、数も増えていた。そして、この空地だけでなく、附近の路上のニオイスマレや一軒先の知人宅の鉢植えのシロバナスマレにもやって来て葉を食っていた。また、面白いことに地面に落ちている巻き上がったカキの枯葉の中に1頭が隠れていた。それにしても数が増えたのは驚きで、前回見に来たときは小さくて見落としていたのが大きくなって見つけやすくなったのかも知れないが、隠れていたものが出てきたり、移動してきたものもあって増えたのではないと思う。

更に、今度は予想もしなかった筆者の自宅にも幼虫がいるのを発見した。10月13日、ツボスマレ、タチツボスマレ、ヒメスマレがそれぞれ侵入して生えている鉢に、4.5cmに成長した幼虫が2頭いたのである。

そして、またまた知人から蛹が見つかったとの知らせがあったので、11月2日に見に行った。蛹はヤブランの葉裏（地上高約20cm）とヒオオギの花穂（地上高約50cm）、ナンテンの葉裏（地上高約120cm）に垂下しており、他にヤブランの葉裏（地上高約20cm）に壊れた脱殻があった。

このように、筆者が平地の市街地で幼虫や蛹を確認したのはまだ3例に過ぎない。しかし、平地の市街地やその周辺でも、公園や学校、墓地、川原などには結構スマレが残存している。庭園やベランダのプランタなどにはニオイスマレやドイツスマレなどが植えられており、山野草の愛好家はいろいろな野生のスマレを栽植している。そして、それらのものが逃げ出して路地に生えていることもある。

西宮市南郷町のもは、近所のベランダから種子が飛んで来て生えたものと知人が捨てた種から生えたものである。つまり、食草であるスマレ類は結構平地の市街地にもあるわけであって、ある程度の量があり、産卵や蛹化する場所があるなど条件が揃えば、発生しても不思議ではない。これまで人近い所は敬遠されていたと思われるが、偶然、食草を見つけて産卵し、発生したのであっても安全なことを知れば、繰返し発生するようになることが充分に考えられる。例えば、アゲハは畑や農家の庭の片隅のミカン類やサンショウで発生するものであるが、最近ではちっけな住宅のプランタや鉢植えのサンショウでもよく発生する。

ところで、お隣りの伊丹市でも西野の武庫川川原以外に、昆陽池公園でツマグロヒョウモンがよく見られるとのお話を同市市立昆虫館の正木清文館員から聞いた。同市内でもどこかで発生しているに違いないので、幼虫を見つけたとの話が聞けることを楽しみにしている。

また、芦屋市については、同市川西町に在住の西 隆弘氏にたずねたところ、近年、芦屋市内でもツマグロヒョウモンの雄をよく見るが、1991年には雌も見たとのことであった。また、ご近所の知人宅では2、3年前から庭のパンジー（三色スマレ）で発生しており、成長の過程を撮影しておられるとのことであった。

さらに、神戸市については、高橋寿郎氏によると、1991年は市内でツマグロヒョウモンが多かったし、小林桂助氏のお話では六甲山麓一帯でも非常に多かったとのことであった。

こうしてみると、山地、平地の別なく阪神間ではツマグロヒョウモンが増えたことは確かであって、従来、主に山地で発生し、生活していたのが、増えたため平地のしかも市街地までも生活領域を広げたと考えられる。ツマグロヒョウモンは東洋熱帯に広く分布し、本州西南部、四国、九州、南西諸島に普通で、四国、九州の平地では最も普通であるが、越冬態は幼虫で、幼虫は寒さに弱いため、冬の低温が分布を規制しているとされている。また九州あたりでは第1化は4月頃から、第2化は6月頃から羽化するとされているので、春から秋にかけて成虫が見られるのであるが、阪神間では夏から秋にかけて見られ、よく見られるのは秋であった。これはやはり、越冬する幼虫がいなかったか又は非常に少ないため、春から初夏にかけて現れる成虫がいなかったか又は非常に少なく、温暖地から飛来したものから生まれる次世代の成虫がよく目についたものと考えられる。ところが、最近の温暖化のため、飛来する成虫の数が増えたことと冬の低温の緩和により幼虫の越冬が容易になったため、夏から見られる成虫が増え、秋にかけて非常に多くの成虫が見られるようになったと考えられる。よく調べれば、春に見られるものもあり、初夏に見られるものも増えているに違いない。

こうして増えてきたため、市街地であってもスマレ類があると発生するようになったと思われるが、本当に平地の市街地に定着したかどうかは、10年位様子をみないことには断言できない。緑の激減、排気ガスによる大気汚染、酸性雨による植物の被害など、自然環境の悪化に伴い、ますます昆虫相が

貧弱になっていく市街地とその周辺にあって、美しいチョウがたとえ一時的にしろ住みつくことは、われわれ虫好きだけでなく、一般市民にとっても楽しいことである。しかし、地球の温暖化がわれわれの生活をおびやかすことを考えると、もし温暖化が増加の原因であれば、楽しんでばかりいられない不吉な前兆ともいえる。とはいえ、近年、タカの仲間が都市の高層ビルに営巣する話やカワセミが都市の池に帰って来たというニュースをよく聞く。これまで人間を一方的に避けていた小動物たちが、人間の作った環境に順応するだけでなく、むしろ利用し始めたのであれば、ツマグロヒョウモンの市街地での生育も素直に喜んでよいと思う。

終わりに、これまでに観察したことと参考文献を紹介する。また、各市の状況をお知らせいただきました正木清文、西 隆弘、高橋寿郎の諸氏に厚くお礼を申し述べます。

I 観察したこと

幼虫の食草は次のスマレであった。これらのうち三色スマレは、栽培技術の進歩により11月末より咲き始めて翌年4月中まで咲き続けるので、多くの花壇に使用されるが、開花期間中のみ栽植されることが多い公園などの花壇では食草にはなりにくいと思われる。

在来種 無茎種 スマレ、シロバナスマレ、フモトスマレ、ヒメスマレ。

有茎種 タチツボスマレ、ナガバナタチツボスマレ、ツボスマレ。

外来種 ニオイスマレ、ドイツスマレ、三色スマレ。

つまり在来種、外来種、有茎種、無茎種の区別なく食草にするわけで、前記以外の各種スマレを食草とするに違いない。

産卵は食草に直接行われるか又は食草の近辺に行われるとされるが目撃していない。幼虫はよく移動し、攝食時以外は食草から離れて付近の地面、苔上、他の草上にいることが多い。また、枯葉の中に隠れていることもある。多くのチョウ類の幼虫が大抵食草上にいるのと異なり、攝食時以外は必ずしも食草上にいるとは限らない。

蛹化場所は、食草近くの草丈の低い草又はかん木の葉裏で、地上高20~120cm程度の所が多いが、この程度の高さの所で、石の側面や人家の塀のこともある。

年に何化かはわからないが、最終と思われる羽化直後の個体が、1991. 11. 6, 11. 22 及び 11. 30に西宮市南郷町で目撃されている。なお、11月30日のものは、2日間、知人宅の庭にいたが、12月1日に弱々しく飛び去ったそうである。こうした個体は、その後どうなるのであろうか。武庫川や神戸市青木の海岸では秋に南下する個体をよく見たし、殊に海岸では海に向かって飛び出して行くのが

見られるので、気温がひどく低下しなければ、温暖な地域に移動するものもいるだろうが、11月末になると動作は極めて緩慢なので、そのまま死滅するものと思われる。

越冬態は幼虫であるとされており、大阪府交野市妙見坂では4月上旬に1～2cmの幼虫が確認されていることから比較的若令の幼虫が越冬するのかと思っていたが、1991年11月末現在、西宮市南郷町では終令と思われる4～4.5cmの幼虫が生存しており、令数にこだわらないかも知れない。また、西宮市南郷町ではその後も蛹が見つかっており、1991年11月末現在、5頭の蛹がいるので、蛹での越冬があるかも知れない。来春うまく羽化できることを楽しみにしているが、もう1頭いた蛹からは11月22日にヒメバチの一種が出現したので、残る5頭についても不安でならない。

平地や市街地で成虫が好んで吸蜜する花は次のとおりである。

セイタカアワダチソウ、キンケイギク、コスモス、アザミ類、シオン、ヤブカラシ、アベリア、三色スミレ。

参考文献

原色昆虫大図鑑Ⅰ 昭和47年6月25日発行、北隆館。

原色日本蝶類幼虫大図鑑<Ⅱ> 昭和57年7月1日発行、保育社。

生物大図鑑—園芸植物Ⅱ 昭和61年7月1日発行、世界文化社。

寶塚昆蟲館報 第36号。

昆蟲を採る箕面・能勢 昭和23年6月25日発行、宝書房。

六甲の自然 昭和34年4月10日発行、六月社。

六甲の自然 昭和57年9月10日発行、神戸新聞出版センター。

海をわたる蝶 1985. 5. 20. 蒼樹書房。

Crude No. 23 Dec. 17, 1982. 大阪昆虫同好会。

Crude No. 25 Dec. 20, 1984. 大阪昆虫同好会。

Crude No. 26 Sep. 20, 1985. 大阪昆虫同好会。

Crude No. 32 Oct. 8, 1988 大阪昆虫同好会。

1991.12.30 記

<付記> 西宮市南郷町では、今年(1992)になって3月16日に約3cmの幼虫1頭が発見され、3月23日は約3.5cmの幼虫と約1.2cmの幼虫各1頭が発見された。令数は2～4令と思われ、成長を楽しみにしていたが、その後いなくなってしまったという。スズメにでも食われたのであろう。

宝塚市清荒神のチョウ(追録8)

加藤 信一郎

暖冬、冷夏と異常な気象が続く。当地でもそれと関連があると見たいような事象が目についた。

ナガサキアゲハ 皮肉なことに、昨年7月きべりはむし19(2)掲載原稿を投稿した後、同月30日庭に飛来した1♀を目撃、その後は垣根沿いのボタンウツギやクサギに次々と訪花するようになった。

9月末までに7/8頭を目撃、その中2♂1♀を採集した。

ツマグロヒヨウモン 例年1/2回見るか見ないかといった程度だが、昨夏は8月ごろから清荒神はじめ隣接する売布、米谷、小浜で10月半ばまでしばしば見かけた。また武庫川対岸の末成町の高田氏宅では、7月庭内のセイヨウニオイスマレに産卵、8月上中旬にかけて多数羽化してゆくのが観察されている。

ナガサキアゲハと共に今年はどのような発生が見られるであろうか。

メスグロヒヨウモン *Damora sagana ilona* Fruhstofer

1♀, 6—10—1991. 庭内ツバキのこずえを緩やかに飛しよう中を採集。当地では夏眠後秋に出現する偶産種。1984年に1♀を採集して以来7年振りである。

ウスイロコノマチョウ *Melanitis leda* Linnaeus

1♂, 6—9—1991. 松原佳子採集保管。小浜の同氏宅庭で採集。かなり飛び古した個体である。昨年は隣接する伊丹市の外、奈良、京都で本種の記録が報じられているが(朝日新聞、21—9—1991)、宝塚市内の記録として報告しておく。

笠形山のオオキノコムシ

森田 真澄

兵庫県のオオキノコムシ科は高橋寿郎氏により県下32種分布として纏められている(本誌、第11巻—第1号、第2号、1983年)。ところが笠形山産本科昆虫は全く見当たらない。筆者は笠形山(神崎町

側)において寡少なものはあるが、本科7種を採集している。本報告をもって分布記録の空白を埋めたい。

1. *Dacne japonica* Crotch ニホンホソオオキノコムシ

1990年3月30日, 1頭. 1990年4月12日, 1頭. 1990年5月11日, 1頭.

3例とも菌床シイタケ培地を食害中のものを採集した。和名はシイタケホソオオキノコムシともさ
れている。個体数は少ないとは思われない。

2. *Magalodacne bellula* Lewis カタボシエグリオオキノコムシ

1989年6月8日, 1頭. 1989年7月1日, 1頭.

菌床マンネンタケ培地にて採集。菌床培地の下面と地面の隙間に可成り多い。

3. *Triplax japonica* Crotch ホソチビオオキノコムシ

1988年10月15日, 1頭.

ヤマザクラ枯木上のウスヒラタケに多く見られた。

4. *Triplax sibirica* Solsky シベリアチビオオキノコムシ

1990年9月4日, 1頭.

ウスヒラタケ上に多く見られた。

5. *Neotriplax lewisii* (Crotch) アカハバビロオオキノコムシ

1988年5月10日, 1頭. 1989年5月1日.

カワラタケにて採集。多く見られる。

6. *Tritoma nigropunctata* (Lewis) ツマグロチビオオキノコムシ

1988年5月10日, 1頭.

7. *Tritoma niponensis* (Lewis) クロチビオオキノコムシ

1989年5月6日, 2頭.

カワラタケで採集。個体数は多い。

〔註〕菌床培地、オガクズあるいはコーンコブ等にコメヌカ・フスマ・オカラ等の栄養分を混ぜ合わせて殺菌釜でバクテリア・カビ類を死滅させ、そこにシイタケ・エノキタケ・マンネンタケ等の食用菌を接種し、培養し発生させる培養体。通常、ポリプロピレンの袋かビン内に入っている。

福知溪谷でヨツボシヒラタカミキリ採集

森 和 夫

家族といっしょに福知溪谷へ遊びに行った際に、ヨツボシヒラタカミキリ *Phymatodes quadrimaculatus* GRESSITT を採集したので報告する。

〈採集データ〉

○兵庫県宍粟郡一宮町福知溪谷

19—V—1991, 14exs., 筆者採集

当日の昼過ぎには、空に厚い雲が垂れ込め今にも雨が降りそうになってきたが、溪谷に沿った林道を少し登ってみると、少し上に、伐採されている所があり、道端に多数の枝が捨てられていた。この枝は、冬の間に切られたものらしく、冬芽のままの状態であった。樹種は、コナラのようにであった。その積み重なった枝を見ていると、小さな黒っぽい虫が、緩慢に這っていた。初めは蛾かと思ったが、よく見ると、このカミキリであった。

「長野県のカミキリムシ」(1976年、松本むしの会編)には、本種の生態が詳しく記載されている。それには「昼間は、つる、枯れ枝や葉の陰などにひそみ、夕方頃から行動が活発になる。」と記載されている。

当日の採集時刻は、午後2時過ぎであったが、厚い雲に覆われた天候のため、活動を開始していたものと考えられた。

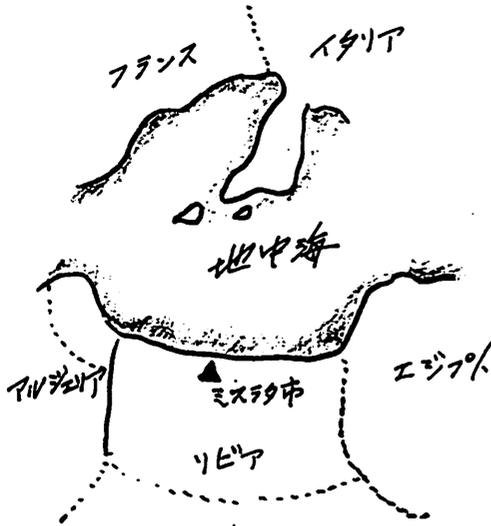
なお、本種は、上翅に4つの白く小さい紋があるが、体長は4～6mm位の小型で暗色の余り見栄えのしないカミキリである。そのせいかどうか分らないが、手元にあったカミキリニュース(1977～81年頃)の関西の記録を捜して見たが、護摩ノ壇山での報告を見付けられただけであった。カミキリ屋さんにとっても、余り魅力のある種類でないため捜さないのかと思ったが、聞いてみると、かなり採集しにくい種類とのことであった。

(付記)ヨツボシヒラタカミキリは御承知の通り播磨産の唯一の標本によって Gressitt 博士が記載された種で(1935)、筆者也神戸市谷上で1頭採集(1958年4月20日)記録を発表させて頂いている(鳥と自然, 59号, p.14, 1990)

(高橋)

リビアからの虫便り

会員の伊藤時雄氏はリビアに会社から派遣されて技術指導をしておられます。3月9日に現地より次の様な虫便りを頂いたので此処に紹介させていただきます。



伊藤時雄氏の手紙の略図による。

突然海外より手紙が届いて驚かされている事と存じます。お許し下さい。さて私は兵庫昆虫同好会のメンバーの1人で、須磨、横尾にいる伊藤と申します。でも現在は1989・9よりこの土地 リビアに会社より派遣されて技術指導を行っています。仕事自身はそんなに忙しくはないものですから、毎週の金曜日（アラブ圏では Friday が holiday です）にそこら辺りを蝶、トンボ、甲虫を求めて走りまわっています。

この土地、リビア特に私の住んでいる地中海に面したミスラタ市辺りでは蝶は17種類、トンボ8種類、セミは2種類、水生昆虫タガメ、ゲンゴロウもいます。多分近くのタメ池に発生しているのでしょう。甲虫ではスカラベ（40mmぐ

らい）、小さなダイコクコガネ（15mm）、センチコガネ、小さな角なしカブトムシ（30mm）とか。この土地はカタツムリが多く日本で言うマイマイカブリとかオサムシの様な甲虫が種類数は少ないのですが数は結構多いです。私自身は蝶が好きな分野ですがこの地は基本的には乾燥した砂漠地帯であり、たゞ地中海沿いにグリーンベルト地帯（幅約10km）が続いているだけですから蝶の種類も極端に少ない様です。又名前の不明なものも多いのですがツマキチョウの一種とか、ベニモンキチョウ及びコヒョウモンモドキの一種が珍しいと云えば珍しいです。知られているものではチョウセンシロチョウ、モンシロチョウ、キアゲハ。又少し離れた地には（1000km）ヤマキチョウ亜種もいます。さらに近くの島のマルタ島（飛行機で30分ほど）にはオオモンシロチョウが飛んでいます。

トンボでは大型のギンヤンマ亜種が数多くおり砂漠地帯とは思われません。このギンヤンマ亜種はシッポ全部がコバルトブルーでそれは美しい限りです。それともひとつ変わったトンボはウチワヤンマの一種がこの地にいる事です。たゞ身体の大きさは日本のシオカラトンボと同じくらいですが例のシッポにウチワがしっかりとついています。

それから私の仕事のアシスタントをしてくれているフィリピン人が先日（去年の12月）ミンダナオ島に里帰りした時例の巨大なアトラスオオカブトムシ??（4本ツノ）を大小♂♀あわせて10匹ほど採って来てくれました。彼にきくと友人が夜にココナツの実にとんでくるのを木に登って採ってくれたとか。このリビアでの仕事が終了したら（今年の12月末の予定）ミンダナオ島にでもよって、生きているアトラスオオカブトムシをこの目で確かめたいものです。

それではつまらない事を長々と書きましたが許して下さい。短報方々御挨拶迄と思ひまして。

1992・2・17. リビアにて 伊藤時雄

県関係 学会誌・同好会誌・連絡誌

(X ・ 1991 — III ・ 1992)

兵庫生物（兵庫県生物学会）

Vol. 10, No. 3 (II ・ 1992)

Crude（大阪昆虫同好会々誌）

No. 35 (X ・ 1991)

のせ（大阪昆虫同好会連絡誌）

Vol. 20, No. 8—13 (Ⅷ—X II ・ 1991)

兵庫陸水生物（兵庫陸水生物研究会）

No. 39・40 (IX ・ 1991)

Nature Kids (Nature Association)

05 (X I ・ 1991)

n/k通信 (Nature Association)

09 (X I ・ 1991)

自然とともに（兵庫県環境管理課）

No. 16 (X I ・ 1991) . No. 17 (II ・ 1992)

混蟲ずかん（但馬むしの会連絡誌）

No. 31 (X I ・ 1991) . No. 32 (II ・ 1992)

編集後記

- 本年も暖冬だったと云えそうです。雪が降りつもる冬と云うのは神戸あたりではもう望めないのでしょうか。
- お変わり御座いませんか。やっと本誌も発行することが出来ました。原稿難で四苦八苦です。自然破壊、環境破壊で近い所では刻々と様相が変わって来ております。ファウナの変化も大きいようです。記録は出来るだけしておくことが重要かと思えます。短報で結構です気軽に虫についての情報御投稿下さい。お願い致します。
- 本年はいよいよ兵庫県立 人と自然の博物館（正式名）が10月9日開館（予定）されるようです（1991年末収蔵庫棟が完成、昆虫関係は500㎡弱とのこと。事務所も4月から三田市に移転しオープン準備に入ると）。どのような博物館が出来るのか大いに期待しています。
- 兵庫県版レッドデータブック作製のため県保健環境部環境局環境管理課自然保護係の下で県の貴重な野生生物等選定委員会が設立されました。部門別に6つに分けられています。昆虫は委員長、神戸大学の桃井節也教授、副委員長、県立人と自然の博物館 中西明德主任指導主事で他に委員が6名から構成されています。第1回会合が平成3年12月24日、第2回が平成4年2月24日と共に“のじぎく会館”で開催されました。

(T)

きべりはむし 第20巻第1号

1992年5月25日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区氷室町1丁目44 高橋寿郎方

振替 神戸7-26646

印刷：(株) 文尚堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11
